The Japanese Geotechnical Society

代表者会議

1997年国際土質地盤工学会代表者会議，ハンブルグ

日下部　　治（くさかべ　おさむ）
社団法人地盤工学会国際部部長　東京工業大学教授

1.　学問分野の拡大と日本の国際的プレゼンス

ハンブルグでのBoard Meeting（理事会）およびCouncil Meeting（評議会）の重要な決定事項は次の2点に集約される。

(1)　学会名がInternational Society for Soil Mechanics and Foundation Engineering (ISSMFE)，日本語訳国際土質基礎工学会からInternational Society for Soil Mechanics and Geotechnical Engineering (ISSMGE)，日本語仮訳国際土質地盤工学会に変更したこと，

(2)　石原研而地盤工学会会長が第12代国際学会会長に選出されたこと。

1番目の事項は，我が国の土質工学会が地盤工学会に変更したように，近年学問分野が量的に拡大し，質的にも力学ばかりでなく化学・環境科学へと広範囲になったことを意味し，2番目の事項は石原会長個人の際だった国際的学問業績と知名度に加えて，地盤工学会のTechnical Committee (TC) の運営や国際シンポジウム（ISシリーズ）の開催などの国際活動を通じた国際的プレゼンスを強く示したという意味で象徴的である。いずれにしろ石原会長の任期のこれから2001年までの4年間，従来にも増して国際学会の場での我が国の地盤工学会の国際的活動・参画に注目が集まることは疑いもない。なおこの報告では国際学会のことを新しい名称としてISSMGEと統一して表記する。

2.　国際学会の運営

ISSMGEは16 741名を擁する大学会である。その組織運営には70の参加学会の多国間の異なる意見が存在し，情報収集力，忍耐力，交渉力，社会情勢の変化への対応能力が要求される。現在の国際学会の運営組織は，運営主体としてのBoard（理事会）と意思決定機関としてのCouncil（評議会）から構成され，Boardの構成員は，現会長，6名の副会長，3名の会長指名理事，前会長，事務総長の合計12名からなり，年1回会合をもつ。Council Meetingは現在は70の所属学会から正副2名の代表者が出席して隔年に開催され，学会の規約の改変，種々の人選，会議開催地などを決定する。今回は，木村孟前副会長，日下部国際部長の2名が参加した。

3.　主な討議内容と結論

議題は29項目もの多岐にわたるが，主な討議内容と結論を要約すれば以下の様である。

(1)　定款の変更

近年の急速な政治的・社会的変化に対して国際学会は迅速な対応が要求されてきていることや，加盟参加学会が急速に増えつつある状況から，定款の見直しが必要となっている。さらに前2回のCouncil Meetingのいずれも定款変更の議決に足る定足数に達しなかったことも見直しの強い動機となっている。その主な論点は，国際学会の意思決定を迅速にし，かつ多数決原理を導入しようとすることである。現在の規定では，定款条文は満場一致でなければ変更できないことになっている。そのため，代理投票権の制約を厳しくする（定款12条），定款変更を伴う議決要件を満場一致の原則から3/4以上の多数決原則に変更する（定款18条），定足数に代理投票権を数える（規則12条）の3件が投票に付された。その結果，定足数に代理投票権を加える案件のみ満場一致で可決されたが，2つの定款変更の案件はいずれもわずか1票の反対票で成立が見送られた。国際社会での意思決定の難しさである。

(2)　学会名称

ISSMFEをISSMGEに変更する案は，2年前のカイロのCouncil Meetingでも議論され投票にかけられたが1票の反対で成立しなかった経緯がある。今回は満場一致で成立し，ハンブルグ会議直後から正式に国際学会がISSMGEとなった。これに関連してフランス語訳としてGeotechnical Engineeringに対応するフランス語としてGeotechniqueが適当であること，との情報が提供された。ちなみに，4年ごとの国際会議の番号づけは変更せず，次回のインスタンブール会議は15回ISSMGEとなる。

(3)　正副会長の選出

副会長の選出は，既に数か月前に書面投票で行われ，選出された6地区の副会長は以下のとおりである。

アフリカ	Mr. Houssine Ejjaaouani
アジア	Prof. Sang-Kyu Kim
オストラシア	Prof. Mark Randolph
ヨーロッパ	Prof. Dr. Hein Brandl
北アメリカ	Mr. Guillermo Springhall
南アメリカ	Prof. Francis Bogossian

会長選は，オーストラリア，カナダ，ドイツ，イスラエル，ロシア，南アフリカの推薦を受けたProf. Harry G Poulosとインドネシア，日本，韓国，ポーランド，スリランカの推薦を受けた石原研而現地盤工学会会長との一騎打ちとなった。いずれにせよ接戦との前評判のとおり，30票対24票で石原地盤工学会会長が第12代国際

NII-Electronic Library Service

The Japanese Geotechnical Society

学会会長として選出された。選挙の前後の情報から推測して石原候補にはアジア，南アメリカ，東・南ヨーロッパから主に強い支持があったようである。

(4) 情報化

ISSMGEは昨年までにアジア工科大学にあるGE-IRC（Geotechnical Engineering-International Resources Centre）と協定を結び地盤関係の40のデータベースを含む大きなデータベースを構築し，そのディスクを50米ドルで購入可能なような仕組みを仕上げているが，現在，スウェーデン地盤工学会（SGI）のデータベース（SGI-Line）と結ぶ話が進行中で，SGIはインターネットを通じて1976年以後の45 000の技術情報を持つデータベースにアクセスする権利を年間250米ドルで個人に提供し，将来各所属学会の情報も取り入れる提案を行っている。ISSMGEは後述するモデルライブラリーの拡張として25のアクセス件を購入し，さらに1976年以前の情報入力のためにSGIに資金提供することが基本的に合意されたが，この件は新Boardで詳細に検討される。

(5) 使用言語

ISSMGEでは公用言語として英語とフランス語を採用しているが，同時通訳を提供するとの条件付きで開催国の言語も使用できるようにとの定款3条改定の動議がドイツから出された。開催地の組織委員会では現地での集客動員のために現地語の使用が必要であるとの動議理由は納得できない話ではない。一方で英仏語以外にさらに他の言語を取り入れる事への抵抗は大きく，24票の反対票が出てこの動議は今回は成立しなかった。

(6) 技術移転

ISSMGEでは9代国際学会会長Prof. Bromsの発案から，世界的視野での学術教育の振興にも積極的に取り組んでおり，開発途上国の大学教育における書籍充実を目指したモデルライブラリープロジェクトを推進している。今回，英語で書かれた8冊の教科書を1セットとして25セットが用意され，現在までに17の途上国の大学に寄贈されたことが報告された。なおその活動費用は特別会員である企業からの会費が当てられているが，我が国からの特別会員は4企業にとどまっている。また別途フランス語版として7冊をセットにして22大学に配布が行われている。言語の普及が将来の国際戦略と強く関連していることを伺わせる動きである。

(7) 土質力学ヘリテイジ博物館の設立

土質力学とそれに関連する科学技術の歴史的遺産を収集保存し後世につたえようとする考えが1996年サンチャゴでのBoard Meetingで提案されて以来，博物館の設立が議論されてきている。今回具体的にイスタンブール工科大学とミュンヘン科学博物館から場所提供の提案があり，今後継続的に検討をしていくことになった。

(8) 各種イベント開催地

2000年に3姉妹学会がオーストラリア，メルボルンで共同開催するGeoEng2000の準備状況の報告では，会期が11月19日から11月24日で会議の枠組みも決定された。

1999年のBoard Meeting, Council Meetingは五つの誘致希望地の中から投票で12回のヨーロッパ地域会議開催地のアムステルダムと決定した。ここでは2005年の国際会議の開催地が投票で決定される予定である。前回のカイロでのCouncil Meetingでは2001年の15回国際会議誘致に大阪が立候補したが，イスタンブールに決まったとの経緯があり，再度地盤工学会が立候補するか今後早急な意思決定が必要になろう。また，1996年第2回大阪，1998年第3回のリスボンに続く，第4回の環境地盤工学会議が2002年ブラジルで開催されることが決定した。さらに現在，各地域ごとに行われている若手地盤工学者会議（YGEC）の世界版を2000年に開催するとの提案が英国からあり，これも了承された。

4. アジア地区の代表者会議

新副会長Prof. Kimの呼びかけで本会議会期中に行われたアジア地区の代表者会議についても多少触れておきたい。主な合意事項は，

(1) アジア地区のYGECを各国の持ち回りで行うとの日本からの提案は基本的に了承され，第4回YGECは1999年の早い時期に韓国で開催される方向となったこと，

(2) 現在まで日本の学会のみがホストしているアジア地区のAsian TCを各国の学会も積極的にホストして更に活発化させること，の2点である。

1995年の北京でのアジア地区代表者会議で議論された，アジア地区の連絡や運営体制のためのセクレタリアートの設立の件も議論されたが今回も具体的結論は得られなかった。

なおKim副会長が任期中，各国の学会を回りたいとの意欲的な発言があったことは注目したい。

5. 終わりに

Council Meetingで配布されたメンバーリストの一覧をみると，国際会員数が多いのはアメリカ（3 586人），ドイツ（1 517名），日本（1 331名），英国（1 016名）の順である。空港建設，地下開発プロジェクトなどアジア地区での地盤工学が係わる建設工事の量の多さから考えても日本からの国際会員数がいかにも少ないとの印象を受ける。今回の石原会長の就任を期に，地盤工学会においても大幅な国際会員の増加が期待される。

現在の情報化，グローバライゼーションの流れは，小規模集団の集積として機能する組織が生き延びると言われている。このような視点からみると4年に一度の大きな会議の歴史的な役割は終えようとしているように感じる。現在31のTechnical Committee（技術委員会）がISSMGEの学問技術分野における主な担い手となり，多くの国際集会やシンポジウムが世界各地で開催されている。地盤工学の発展と構成会員のサービス向上のために，新しい国際学会のあり方と運営方法がもっと議論される必要があろう。

（原稿受理　1997.10.23）

NII-Electronic Library Service